

『ふるさと』の後書きという名の劇

作 高田弥生

登場人物

齊藤俊雄 『ふるさと』の作者・中学校教師

高田弥生 『ずっとそばにいるよ』の登場人物

幕が上がる。

そこは闇の世界。

闇の中から女性の声が聞こえてくる。

声 「わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです」

ドアが開く音に続いて男性の音が響く。

声 こんな夜遅く、いったい誰なんだ。

明かりがつくと、そこは演劇部部室。

教室に入ってきたのは齊藤俊雄先生。

先生の目の前に一人の女性が立っている。

その女性の名前は、高田弥生。

『ずっとそばにいるよ』の登場人物である。

弥生 私の声が聞こえたんですか？

齊藤 聞こえたからここに来たんじゃないか。

弥生 もしかして、私のこと見えるんですか？

齊藤 何馬鹿なこと言っているんだ。見えるに決まってるじゃないか。

弥生 やったー。今度こそ本当に私のこと見える人一人増えた。正彦に伝えなくっちゃ。

齊藤 正彦？ ってことは君は？

弥生 弥生です。もしかして、齊藤先生ですか。

齊藤 (うなずいて)弥生さん、会えてうれしいよ。今さっき弥生さんが声に出して読んでいたのは、宮澤賢治の『注文の多い料理店 序』に書かれている文章だね。

弥生 私が次回作で描こうとしている世界って、賢治が大切にしたい世界と重なるんです。そ

れで…

齊藤 次回作では何を取り上げるの？

弥生 「子ども達が演じることで輝く劇の魅力」です。劇の中で子ども達がびろうどや羅紗や、宝石いりのきもに変わる瞬間って、本当にあるって思うんです。先生は今までにそんな瞬間に出会ったことありませんか。

齊藤 もちろんあるよ。『ずっとそばにいるよ』でいつも棒読みだったレイが、きらきらと輝き出したあの瞬間は、創作されたドラマの中にだけ存在するわけじゃないからね。僕の三作目になる脚本集のタイトルになった『ふるさと』は、子ども達がびろうどや羅紗や、宝石いりのきもに変わる瞬間に何度も立ち合わせてくれた。

弥生 先生にとって『ふるさと』ってどんな劇なんですか？

齊藤 どんな劇か…一言では言えないな。『ふるさと』を書こうと決心した背景には、ある出来事が存在してるんだ。ちょっと長くなるけどそこから話をしてもいいかな。

弥生 お願いします。次回作の参考にさせてください。

齊藤 『ふるさと』を書こうと決心したある出来事って何だかわかるかな。

弥生 いじめですか。

齊藤 (首を振って)実は、東日本大震災なんだ。

弥生 でも『ふるさと』には震災に関する場面や言葉は一つも出てきませんよね。

齊藤 あえてそうしたんだ。

弥生 『ふるさと』と東日本大震災の繋がりを教えてくださいませんか。

齊藤 東日本大震災の報道で、岩手県の大船渡市立赤崎中学校が津波の被害に遭ったことを知った日が『ふるさと』を書こうと決心した日なんだ。大船渡市立赤崎中学校は過去に『夏休み』と『降るような星空』という僕の作品を文化祭で上演してくれた学校だった。震災の後、多くの人達の心の中に「何かできないだろうか」という思いがあったように、僕の心の中にも「何かできないだろうか」という思いがあった。けど、その「何か」を具体的な「何か」にすることはできなかった。でも、赤崎中学校のことを知った瞬間、僕の「何かできないだろうか」という気持ちは、「何かできるはずだ」に変わったんだ。そして、その「何か」が『ふるさと』なんだ。

弥生 先生は、『ふるさと』で何ができるって考えたんですか？

齊藤 被災地の子ども達のために僕らが劇を上演しに行くことは難しいよね。それどころか、独りよがりの善意の押しつけになってしまう可能性が大だよ。でも、被災地の子ども達自身が上演したくなる劇を書くことはできるんじゃないかって考えたんだ。その時はまだ漠然としたイメージしかなかったんだけどね。

弥生 その時はどんな劇をイメージしていたんですか。

齊藤 観終わった後、観た人の心があったかくなる劇。そして、誰かの心があったかくしたことで上演に関わった人達の心もあったかくなる劇。そしてみんなが元気になる劇。

弥生 『ふるさと』の中に震災に関する場面や言葉がないわけがわかりました。そんな場面

とか言葉があったら、心の中があったかくなるどころか上演していて辛くなったり悲しくなったりしちゃいますよね。

齊藤 『ふるさと』は、子ども達が歌う「ふるさと」の合唱で始まり「ふるさと」の合唱で終わる。場面と場面も子ども達自身が歌う「ふるさと」のハミングで繋がっている。なぜそうしたかわかるかな。

弥生 それなら音響設備がなくても上演できますね。

齊藤 場面設定も、全場面が教室シーンだから教室があってそこに机と椅子があれば上演できる。もし、教室がなくてもある程度のスペースさえあれば、そこに机と椅子を置くことで上演できる。『ふるさと』はこの劇を上演したいと思う人が集まれば、上演できる劇なんだ。更に、『ふるさと』は学級劇としても、学年劇としても、学校劇としても、更に観客を巻き込んだ形でも上演できる劇にしたんだ。

弥生 どんなに多くの人数でも上演できる劇なんですね。

齊藤 劇の最初と最後に歌われる「ふるさと」の合唱に参加することができるからね。

弥生 先生が『ふるさと』とともに歩んだ道程について話していただけませんか。

齊藤 最初に『ふるさと』を上演したのは、僕が顧問だった久喜市立久喜中学校演劇部。部員に『ふるさと』という劇・創作の思いを伝えたのは、2012年夏季演劇発表会が終わった後の部室だった。半年後、『ふるさと』は「古川里美(=ふるさと)が転校してきたことで、故郷に特別な思いを持っていなかった子ども達全員が故郷を好きになるドラマ」となった。久喜中学校演劇部が上演した『ふるさと』は、地区大会での上演が評価されて関東大会に推薦され、関東大会で金賞を受賞した。

その一週間後、僕は現在勤めている久喜市立太東中学校に異動となった。

弥生 それって劇の最後でアメリカに転校していく『ふるさと』の主人公・古川里美と重なりますね。

齊藤 そこまではね。でも、全国大会に推薦されたことで、もう一度『ふるさと』を上演できることになったんだけどね。

弥生 『ふるさと』の幕は下りなかったんですね。

齊藤 そして、『ふるさと』は更に続いていくことになるんだ。なんと、大船渡市立赤崎中学校から僕の脚本の上演依頼が届いたんだ。それも一度に二作品。上演依頼書には文化祭で二年生が『魔術』、三年生が『夏休み』を上演するって書かれていた。赤崎中学校の文化祭が開催される日が日曜日だったんで僕はその文化祭を見に行った。そして、その日は忘れられない一日となった。

弥生 どんな一日だったんですか。

齊藤 僕は前日に盛岡のホテルに泊まり、文化祭当日の早朝、車で大船渡市に向かったんだ。盛岡を出てしばらくは、一年前に震災があったなんて感じられない岩手県ののどかな風景を楽しむドライブが続いた。けど、陸前高田市に下っていく途中その風景が一変した。

弥生 どんなふうにか…

斉藤 突然海まで見渡せる風景が目飛び込んできた。それはある場所から向こうの町が廃墟と化しているという衝撃的な風景だったんだ。僕は車から降りてしばらくそこに立ち尽くしていたことを覚えている。その風景は大船渡市に入ってからずっと続いた。僕は津波の爪痕が残されたままの風景の中を運転し続けた後、仮設校舎という形で高台に移転した赤崎中学校に到着した。校長先生から、震災で生徒と教師全員が無事だったのは、学校が海の目の前にあったからだという話を伺った。海の目の前にある学校だったから、地震が起きた直後に避難を開始して全員助かったそうなんだ。

弥生 (その事実に対しての言葉が見つからない)…文化祭の話を伺ってもいいですか。

斉藤 赤崎中学校の文化祭は校舎の横に建てられた仮設の体育館で行われた。体育館は仮設でもそこで行われた文化祭は本物だった。あまりの素晴らしさに僕は何度も涙を流した。文化祭全体が、前に向かって歩いて行こうという子ども達と先生方の思いにあふれていたんだ。僕が書いた『夏休み』と『魔術』は、そんな思いに満ちた中で上演された。それは、作者としてとても幸せな時間となった。

赤崎中学校の先生からの提案で、僕はその日の給食を二年生の教室で生徒と一緒に食べることができた。その時、僕はみんなの前で『ふるさと』の話をしたんだ。『ふるさと』という劇は、赤崎中学校のことを知ったことで生まれたという話を。その時、一人の男子生徒が突然立ち上がって「僕達は来年『ふるさと』を上演します」って宣言したんだ。そして翌年、本当に赤崎中学校から『ふるさと』の上演依頼が届いた。

弥生 劇の中のドラマみたいな展開ですね。

斉藤 実は、僕が「何かできるはずだ」と思った「何か」には続きがあったんだ。

弥生 続き？

斉藤 もし本当に僕が書いた劇を被災地のどこかの学校が上演してくれることになったら、その手伝いに行くことで子ども達を応援することができるんじゃないかって考えていたんだ。

弥生 その「何か」は実現できたんですか？

斉藤 (うなずいて)『ふるさと』を上演する前に赤崎中学校に劇づくりの手伝いに行くことになったんだ。

弥生 その話、聞かせてください。

斉藤 勤続三〇年の教師は年に五日リフレッシュ休暇が取れるんだ。ちょうどその年が僕の勤続三〇年に当たる年だったんだ。それで赤崎中学校と何度も相談を重ねて、その休暇を使って赤崎中学校の生徒が上演する劇づくりの手伝いをするようになった。僕は赤崎中学校を訪問して、総合的な学習の時間に劇づくりの講師を務めた。間違っほしくないのは、僕が行ったことは『ふるさと』の演出じゃないってこと。その日僕が配ったプリントにはこんな言葉が書かれている。

「私がこれからみなさんに伝えることは、自分達で演出する、赤崎中学校のメンバーが

演じることによって輝く『ふるさと』を生み出す方法です」

僕は赤崎中学校の生徒達に「感情に台詞を乗せる方法」を伝えたんだ。

弥生 それって『ずっとそばにいるよ』で私が大切にしたことですね。感情を自分の引き出しから取り出して、そこに台詞を乗せる。

斉藤 練習を始めた直後は、みんな手に台本を持って演じていて、あまり心が動いていなかった。でも、ある瞬間それが大きく変わったんだよ。

弥生 ある瞬間？

斉藤 最後にみんなでラストシーンを演じることになったんだけど、その前に上演する三年生全員を集めて僕がこの『ふるさと』という劇に込めた思いを語った。そして、その話の後にみんなに問いかけたんだ。「君達にとって、ふるさとって何かな」って。その時、昨年「『ふるさと』をやります」って宣言した生徒がこう言ったんだ。「僕にとってのふるすとは大船渡、この赤崎地区です。そして僕はこのふるさとが大好きです」って。

弥生 わー、心が震える言葉ですね。

斉藤 その瞬間なんだ。三年生全体に熱い何か伝わっていったのは。そして、その熱い何かに包まれた中で、ラストシーンが演じられた。

弥生 聞いているだけでぞくぞくします。

斉藤 賢太郎というふるさとが嫌いだった少年が、「ふるさとのいないふるさとなんてふるさとじゃないよ。ふるさとがいたからふるさとが好きになったんだ。ふるさとがいるふるさとが好きなんだ」と言うシーンがあるじゃない。賢太郎役の男子生徒がその台詞を言い始めたとき、目から本物の涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。彼の涙とともに一人一人の心の中に「ふるさと」が灯っていくのが見える気がした。そして、一人一人がそれぞれの役を生き始めたんだ。

弥生 私が登場する『ずっとそばにいるよ』で、ずっと棒読みだったレイが役を生き始めた瞬間と重なりますね。

斉藤 劇の最後の最後にスタッフも含めた三年生全員が「ふるさと」を合唱した。驚いたことに、その「ふるさと」はアカペラの四部合唱だった。その素晴らしい合唱を聴いたとき、当日の成功は間違いないって確信した。

放課後は、希望者だけが音楽室に集まって練習することになっていたんだけど、僕が音楽室に入るとそこにキャストが全員揃っていた。そして、みんな下校時刻ぎりぎりまで練習を続けたんだ。総合の時間を使った劇練習では台本を手放せなかった生徒達が、放課後の練習では全員台本を持たずに練習していたんだ。僕は質問攻めにあって休憩場所となっていた校長室に一度も行けなかったけれど、一度も休憩できないその時間はとっても幸せな時間だった。バスで帰っていく生徒を眺めながら校長先生が満面の笑顔で僕に言った言葉は忘れられない。

弥生 どんな言葉ですか？

齊藤 「生徒達の心に火がつかしました。私達はまずは台詞を覚えなさいと言ってきたけど、まずは気持ちなんですね。気持ちができれば自然と台詞が入ってくる。目から鱗でした」

弥生 赤崎中学校って生徒もすてきですけど、周りにいる先生方もすてきですね。それで、本番はどうだったんですか？

齊藤 赤崎中学校の『ふるさと』は関西弁の『ふるさと』ではなく、大船渡の人達が話す気仙語という方言の『ふるさと』だったんだ。この響きがよくってね。

弥生 ふるさとの言葉で演じられる『ふるさと』だったんですね。

齊藤 そうそう赤崎中学校独自のオープニングの演出もよかったな。劇を上演する前に三年生全員の写真が一人一人スクリーンに映し出されるんだけど、そこに絶妙の演出が施されていてね。

弥生 どんな写真が映し出されたんですか？

齊藤 上演する三年生が「自分にとってのふるさと」を言葉で大きく紙に書いて、それを胸の前で示している写真。一人一人の笑顔とその言葉が溶け合って、ほんと見事だった。

弥生 みんなどんな言葉を書いていたんですか？

齊藤 「赤崎」とか「大船渡」が多かったかな。それと「家族」「友だち」「仲間」、そして「赤崎中学校」。赤崎中学校の生徒はそんなふるさとへの思いを胸に、『ふるさと』を演じてくれるんだなって思ったら、それだけで涙が出てきちゃって。

弥生 作者にとっての最高の幸せって感じですね。

齊藤 まさにそんな感じだった。

弥生 続きを聞かせてください。

齊藤 僕が手伝いに来たときは比較にならないくらい、一人一人の演技が上達していて、劇が始まる前に少しだけあった不安は上演が始まってすぐに消えてしまった。僕は心地よく劇世界を楽しむことができた。ラストシーンで賢太郎が「ふるさと、行かないでよ」って言う場面では、僕の目の前に座っていたおじいさん、おばあさんが、こぼれ落ちる涙を何度も何度もぬぐっていた。最後の「ふるさと」の合唱は三年生だけでなく、一・二年生、そして先生方、更に観客全員が参加する大合唱になった。もちろん僕も一緒に「ふるさと」を歌った。嬉しくて涙が止まらなくなって、しっかり歌えなかったけど。これは劇の中の出来事じゃなくて、現実には仮設の体育館の中で起こったことなんだ。

弥生 仮設の体育館を、ひどいぼろぼろのきものに例えたら失礼かもしれませんが、そこは設備が備わった場所ではなかったわけですよね。でもそこで上演された『ふるさと』は、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものになったんですね。

齊藤 宮澤賢治が大切にしたい世界、そして僕が大切にしていきたい世界がそこにあった。観終わった後、胸の中があったかい気持ちでいっぱいになり、僕自身が元気になっていた。

弥生 赤崎中学校を思って創った『ふるさと』が本当に赤崎中学校で上演された。『ふるさと』のドラマが完結したわけですね。

斉藤 完結はしていないのかな。

弥生 どういうことですか？

斉藤 昨年、赤崎中学校で僕の作品を上演してくれた先生からメールが届いたんだ。そこには、「異動先の陸前高田の中学校で『ふるさと』を上演します」と書かれていた。そして、メールの最後にこんな言葉が添えられていた。

「東日本大震災で被災した陸前高田はまだ復興の途中ですが、この演劇を通して、生徒、保護者、地域の人が元気になれるように、取り組みたいと思います」

弥生 『ふるさと』のドラマは今も続いているんですね。

斉藤 昨年は被災地の学校だけでなく、関東でも北海道でも四国でも九州でも『ふるさと』が上演されたんだ。僕は日本の各地で、さまざまな『ふるさと』が上演されていることに喜びを感じている。

弥生 『ふるさと』と一緒に子ども達と創る演劇の輪が広がってくといいですね。先生、ありがとうございました。おかげで次回作の構想が固まりました。

斉藤 それはよかった。(そう言った後、大きなため息をつく)

弥生 どうしたんですか？

斉藤 実は、脚本集の後書きの部分がどうしても創れなくて困ってるんだ。

弥生 先生は後書きにどんなことを書こうと思っているんですか？

斉藤 弥生さんが書きたいことと同じ。

弥生 それって…

斉藤 「子ども達が演じることで輝く劇の魅力」

弥生 先生、こういうのはいかがでしょう。私が今、先生と話した内容を、先生との対話の形で書いて、それを後書きにするんです。題名は「『ふるさと』の後書きという名の劇」。

斉藤 それナイスアイデアだよ。弥生さんお願いできるかな。

弥生 わかりました。正彦と一緒に創ってみます。

斉藤 正彦君と？

弥生 (あっ)私、幽霊だから、正彦の力を借りないと…

斉藤 そっか…

弥生 完成したら正彦に届けてもらいます。

斉藤 ありがとう、弥生さん。

そう言った後、斉藤先生は毎日の活動場所である演劇部部室＝教室を見つめる。

斉藤 弥生さん。『注文の多い料理店 序』をもう一度読んでくれないかな。今、その世界に浸ってみたいんだ。

弥生 わかりました。

どこからともなく弥生の大好きな『トロイメライ』が流れてくる。

弥生 「わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとおりに書いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども…」

弥生はそこで読むのをやめる。

斉藤 どうしたの？

弥生 この先は斉藤先生が読んでください。

斉藤 僕が？

弥生 先生の今の思いと重なる気がするんです。

斉藤 僕の今の思い…

弥生 先生。先生の今の思い、届けてください。

斉藤 届けるって、誰に？

弥生 決まってるじゃないですか。

斉藤 決まってる…

弥生がうなづく。

斉藤先生はゆっくりうなずき返し、正面を向く。

そして大きく息を吸い込み静かに語り出す。

斉藤 「けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あ

あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません」

『トロイメライ』が静かに流れる中、
幕